

資料館だより

第75号
2015.3.2

目次

実験考古学でさぐる縄文の技術と植物	2	赤レンガ建造物 新橋駅と高架橋	5
なるほどッ考古学（5）		江戸の中の高札場 — 御入用高札場考 —	6
石器の実測図をみてみよう	3	文化財を引き継ぐために	
コーナー展 港区の遺跡 — 最近の発掘調査から —	4	～ 館蔵資料『勝海舟書画卷』を修理しました～	7

区内の遺跡から埴輪が出土しました！



写真1 豊後森藩久留島家屋敷跡遺跡出土 境輪



写真2 増上寺寺域第2遺跡出土 馬形埴輪

江戸時代の大名屋敷跡である、豊後森藩久留島家屋敷跡遺跡（三田三丁目）の調査中、久留島家屋敷内にあった石垣の裏側の土から、埴輪の破片が出土しました（写真1）。

港区には、芝公園内に立地する前方後円墳、丸山古墳やその周辺の円墳群をはじめとして、かつては多くの古墳が存在していたと考えられています。しかし、後代の開発によってそのほとんどが消滅してしまいました。豊後森藩久留島家屋敷跡遺跡周辺の高台にも、亀塚など古墳と想定される遺跡が存在しますが、これまで明確な証拠の発見には至っていませんでした。今回出土した埴輪は、久留島家の屋敷造成時に周辺から混入した可能性があり、区内の古墳を考え上で重要な発見となりました。

実は、区内で出土位置が明確に記録されている埴輪としては、今回が2例目です。最初の例は、増上寺寺域第2遺跡（芝公園四丁目）で出土した埴輪で、馬形埴輪のあごの部分の破片と考えられています（写真2）。

豊後森藩久留島家屋敷跡遺跡出土の埴輪は、その特徴から、古墳時代後期、6世紀中葉から後葉頃に利根川中流域で製作された円筒埴輪であると考えられます。ただし、復元される径が小さいため、形象埴輪（人物や動物、器財などをかたどった埴輪の総称）の台部である可能性も残されています。

今後も調査・研究を進め、港区の古墳とその時代の解明に努めていきます。

実験考古学でさぐる縄文の技術と植物

山田 昌久

(首都大学東京教授)

遺跡を調べることのおもしろさとむずかしさ

考古学の研究は、長い間遺物・遺構を観察して形やデザインを区別し、何時のものかどの地域のものかを比較・整理してきました。またその形からどのような役割を持つのかを推定してきました。記録は写真や実測図で成されてきました。

第二次大戦後の昭和20年に、原始・古代の部分を、考古学の成果から説明して歴史を語ることになり、縄文時代・弥生時代などの日本史の時代区分が普及しました。私たちの生活する土地の下に残された過去の生活痕跡の発見は、私たち日本人のルーツへの関心を高めました。

しかし、縄文時代や弥生時代が、どの様な社会や経済であったのかを説明しようとすると、土器や石器の形やデザインの説明では、議論できる内容は限られていきました。過去の人びとの生活をどう描くかという課題は、研究資料の質や分析方法を変えることを要求したのです。

環境考古学調査の活発化

昭和40年代から遺跡発掘の場で、目にした人工物を取り上げて調べる以外の調査が積極的に導入されるようになって、理工学分野の調査が加わりました。その土地がどのように出来上がってきしたものなのか、過去の気候はどのように変化したのか、生活環境はどのようなものだったのか、などの議論に必要な情報を、遺跡・遺物から得ようとする調査が始まりました。

日本の土地がさまざまに変化してきて2万数千年前には東京湾は陸だったこと、8千年前に瀬戸内海ができたことなどが分かり、森の拡大もその頃に始まり、縄文人の生活はその森を活用したものだったことが明らかになりました。

どんな動植物をどんな技術で利用していたのかを考える際、遺跡から発見された動物の骨や植物の種子・花粉などの情報に、それにかわる



【上：図1】石斧では20センチの木が10分で切れる。

【下：図2】蔓を採取して保管し縄や籠を作る。

技術を加えた研究が必要です。

その時々の村規模や作業力を示すことで、縄文人の資源利用の特徴がえがけるのです。

実験考古学の必要性

そうなると、遺物や遺構がどのように役立っていたのか、どんな効果があったのかを明らかにするため「実験考古学」の実施が必要になります。石斧は10分で住居の柱の木を伐採できるし、木や草や蔓を使って縄や籠を作ると、周到な加工知識が有った事が分かります。縄文人は、資源を自然の中から選択して、利用に関わる技術を多数開発して集落生活を実現したのです。

3月に3回の講演会があります

私は3月に、港区の皆さんにそういった縄文人の知恵を調べた研究をお話すことになりました。最新の研究成果に期待してください。

なるほどッ考古学

(5) 石器の実測図をみてみよう

岡本 康則

(埋蔵文化財調査員)

写真1は、赤坂九丁目7番にある長門萩藩毛利家屋敷跡遺跡から出土した石器です。この石器は、3万～3.3万年前、旧石器時代に暮らしていた人びとが使っていた石器で、ナイフ形石器と言います。ナイフ形石器は、素材となる石のかけらの1部分を刃として残し、他の部分は剥離加工をしている石器です。

この石器などの出土品は、発掘調査報告書などでは、石器を観察して得られた情報を書き入れた実測図を使って紹介されます。実測図を見れば、その石器が製作されるまでの過程などを知ることができます。

実測図を見ていく前に、少し用語の説明をしていきます。

正面・側面・裏面…石器を各方向から見た図です。
稜線…石器の中に見られる、剥離の跡です。

剥離面…石を割ってかけらを作った跡です。
打点…石を割るときに、叩いた場所です。

リング…打点から伝わった力が同心円状に広がった跡で、水面に生じる波紋と同じように、輪が広がっていきます。

フィッシャー…打点から放射状に広がる亀裂の様なものです。石器のふちによく見られ、剥

離の順番を知ることができます。稜線からフィッシャーが飛び出している方が新しい剥離です。

では、実際に写真の石器をもとに描かれた実測図を見てみましょう。

まず側面を見てみます。左側面の下側には、多くの細かい剥離面が描かれています。これは、刃潰しの為に加工されたものです。その上は細かい剥離が無く、この部分が石器の刃であることがわかります。右側面は、上から下まで刃潰し加工がされていることがわかります。

次に正面からです。正面には、剥離面が3つ見られます。左上に見られるものは、稜線からフィッシャーが飛び出しているので、中央の剥離面より後に作られたことがわかります。また、リングの形とフィッシャーの向きから、打点は左上の方向にあったことがわかります。中央の剥離面は、リングの形やフィッシャーの向きから、右上から力が加わったことがわかります。

最後にクイズです。裏面の大きな剥離面は、どの方向から力が加わったでしょうか？

【参考文献】『萩藩毛利家屋敷跡遺跡』((財) 東京都埋蔵文化財センター、2005年)

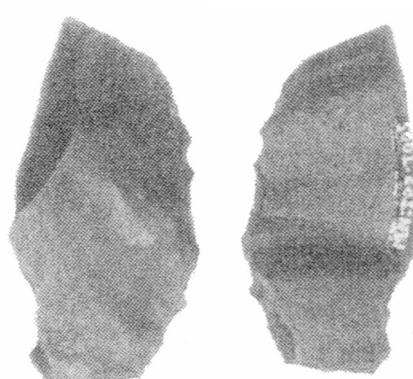


写真1 ナイフ形石器

末尾【参考文献】より引用

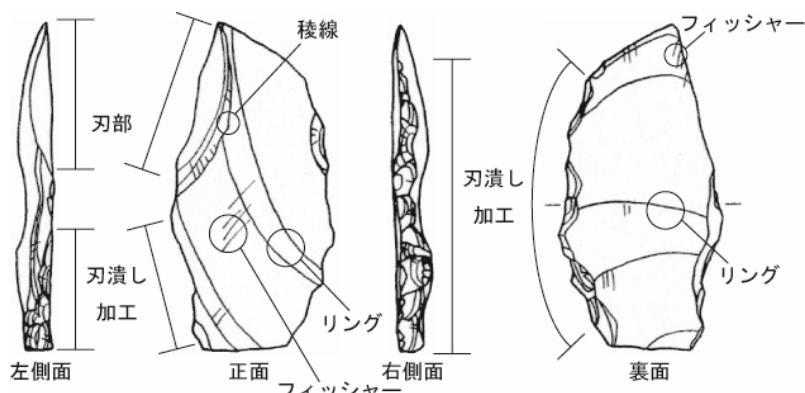


図1 ナイフ形石器実測図

末尾【参考文献】所収第5図21を加筆・改変

。左半分は刃部、右半分は剥離面です。下から上へ向かって剥離が進んでいます。

港区の遺跡

— 最近の発掘調査成果から —

駒形 あゆみ
(学芸員)

平成26年12月19日から平成27年2月18日まで、「コーナー展 港区の遺跡－最近の発掘調査成果から－」を開催しました。この展示では、最近港区内で行われた発掘調査の中から、六本木周辺に位置する、旗本花房家屋敷跡遺跡、長門萩藩毛利家屋敷跡遺跡、麻布龍土町町屋跡遺跡の3遺跡の調査成果を紹介しました。

現在の六本木界隈は、昼夜を問わず多くの人がとて賑わう繁華街として知られていますが、江戸時代には、大名や高禄の旗本などの大規模な武家屋敷が建ち並ぶ屋敷街でした。江戸時代のはじめ、麻布台と呼ばれる台地の上に屋敷地を拝領した大名や旗本は、時に大規模な造成を行い、御殿や庭園などを整備して屋敷を整えました。ここでは、そのような屋敷の中から毛利家の麻布六本木屋敷跡である長門萩藩毛利家屋敷跡と、その表門の正面に位置した町屋跡、麻布龍土町町屋跡遺跡について紹介します。

長門萩藩毛利家屋敷跡遺跡は、萩藩毛利家が、寛永13年（1636）に下屋敷として拝領した屋敷の跡で、拝領当初は2万7千坪余、後に北側の明地を取り込み3万6千坪余という広大な屋敷地となりました。一時期中屋敷となつたほか、藩主が住む居屋敷としても度々使用されました。元治元年（1864）の第一次長州征伐の折、幕府により屋敷は没収され、わずか3日の内に建物が取り壊されたと記録にあります。その後、明治初期まで火除地となっていました。

遺跡の調査は、平成14年から数次にわたって行われ、これまでに屋敷地の40%にあたる約48,000m²（1万4千坪余）が対象となりました。今回の展示は、そのうち平成25年度に行われた約700m²の調査で出土した遺物を中心に行いました。調査が行われた範囲は、表御殿の北側、藩主やその家族の私的空间である長局の裏手に

相当します。近代以降のかく乱により、検出された遺構はわずかでしたが、長門萩藩の国元、現在の山口県で製作された萩焼の陶器をはじめ、風炉や茶碗といった茶の湯で用いられたと考えられる資料など、多くの遺物が出土しました。日常の食事に用いる碗や鉢などが少ない点に、今回の調査の特徴を見出すことができます。

毛利家の屋敷の表門、「御本門」と、それに連なる表長屋に相当する場所から道（現在の外苑東通り）を隔てた所に、麻布龍土町町屋跡遺跡は位置します。武家地が高台など比較的立地の良い場所にあるのに対し、町屋は低地など条件のあまり良くない場所に立地する例が多く見受けられます。しかし、麻布龍土町町屋は縁辺ではありますが、台地上に営まれていました。

平成25年に行われた調査では、土坑や井戸などの遺構から、18世紀末から19世紀前葉に廃棄された遺物が出土しました。「麻布龍土町 清水屋善蔵 体升吉」と線刻された銅製迷子札や土製の玩具など、町屋に暮らした人々が所持していた遺物が認められた一方で、明らかに毛利家屋敷より持ち込まれたと考えられる遺物も多数確認されました。将軍家への献上品として製作された鍋島焼や、「長州」の文字が刻まれた赤間硯、饗宴で食されたツルの骨など、通常町屋跡からの出土は想定できない遺物群です。

麻布龍土町にどのような人々が居住し、どのような商店が軒を連ねていたのか、そして毛利家屋敷とはどのような関係性であったかには、現在のところ詳しく分かっていません。しかしながら、毛利家屋敷内に住んだ人々、特に表長屋の藩士と町屋の人々との間には日常的な交流が存在していたのではないでしょうか。

【参考文献】『萩藩毛利家屋敷跡遺跡』（（財）東京都埋蔵文化財センター、2005年）他

赤レンガ建造物 新橋駅と高架橋

川上 悠介
(学芸員)

平成26年（2014）12月20日は東京駅開業100周年の記念すべき日でしたが、この日は新橋駅が現在地に移転し100周年を迎えた日でもありました。

新橋駅は、明治5年（1872）日本初の鉄道開通を象徴する駅（停車場）で、当初は、現在の汐留シオサイト内にある旧新橋停車場鉄道歴史展示室の場所に建っていました。現在の新橋駅は、明治42年（1909）12月16日、^{からすもり}鳥森駅の名で開業します。

鳥森駅の駅舎は、開業当初の明治42年には簡素な駅舎でしたが、5年後の大正3年（1914）、東京駅の開業にあわせて赤レンガの駅舎が新築され、駅名も新橋駅に改称されます。新築された駅舎は、先に建築されていた神田の万世橋駅（明治44年完成）を参考にしたと言われています。万世橋駅の設計には、建築家辰野金吾が関与しており、新橋駅・東京駅に先駆けて万世橋駅の赤レンガ駅舎が完成します。当時の辰野は、レンガ造を得意とし、その独自のデザインは辰野式と呼ばれるようになります。新築された新橋駅は、2階建てのレンガ造りで、万世橋駅や東京駅のようにレンガと横長に配された白色石の縞模様が特徴とされ、辰野作品を参考にしていることがうかがわれます。



関東大震災前の新橋駅の絵葉書（当館蔵）

この赤レンガの新橋駅舎は、解体される昭和44年（1969）年までに2回の大被害を受けています。大正12年（1923）の関東大震災と昭和20年（1945）の東京大空襲によるものです。

関東大震災では内外部に火が入り大きな被害を受けます。現在の感覚だと建て直されてしまいそうですが、特徴的な屋根を取り除き平らな屋根として、躯体であるレンガ壁を残し、修復が行われました。

また、東京大空襲で新橋周辺は焼け野原となります。駅舎は残り、戦後も使われていました。昭和30年代後半に、新幹線を通すため、線路の拡張工事が進められます。これに伴って、駅舎背面は削られ、規模を縮小します。その後、昭和40年代半ばに、地下ホーム建設に伴う改修工事にあたり赤レンガの駅舎は解体されました。そして、昭和51年（1976）に現在の新橋駅舎が竣工します。

時代は前後しますが、明治43年（1910）、鳥森駅の開業時、浜松町から有楽町の間には赤レンガを積んだアーチ構造の高架も完成しています。日本初の赤レンガ市街地高架橋の誕生です。これらは、現在でも鉄道路線として使用されており、アーチの下も店舗や事務所として活用され、夜になると仕事あがりの会社員でにぎわっています。東京駅、新橋駅、万世橋駅の赤レンガ駅舎に加えて、これらの赤レンガアーチも木造建築が建ち並ぶ東京に新たなる時代の到来を感じさせるものでした。

明治の初頭、人々は近代化、洋風化への憧れを抱いていました。これらを具現化したもの一つが赤レンガの駅舎であり、高架橋です。劇的かつ急速な変化を遂げた東京の街に造られた赤レンガ建造物は、近代化遺産として大変貴重なものと言えます。

江戸の中の高札場

— 御入用高札場考 —

竹村 到

(文化財保護調査員)

江戸時代、各地に幕府の基本法令を掲示した高札場が設置されました。江戸の場合、「大高札場は常盤橋門内・筋違橋門内・浅草橋門内・麹町半蔵門外・芝車町(札ノ辻)と日本橋南詰西の六カ所あり、ほかに三十五の高札場があった」(『江戸学事典』弘文堂)と説明され、計41か所の高札場があったといわれています。

ここでいう高札場は、「御入用高札場」のことを指していると考えられます。「御入用」とは幕府の公的資金で、これが高札作成などに利用される場所が「御入用高札場」となります。

大高札場は江戸の重要な地点に設置され、維持・管理費用も幕府の負担でした。一方、維持・管理費用が町方の負担と考えられている「三十五の高札場」は、渡辺浩一氏の指摘にあるように、実際には35か所以上存在したと考えられ、その所在場所も現在のところ不明です。

「高札場書留」(旧幕引継書、国立国会図書館所蔵)という史料に、18世紀中ごろにおける、江戸の高札場の所在一覧が記されています。

これによると、当時の江戸には「御入用高札場」は計62か所あり、大高札場が6か所、そうでないものが56か所とされています。このうち現在の港区域の「御入用高札場」を示したもののが下表となり、計11か所ありました。

No. 1 が高輪大木戸脇(現 高輪二丁目)のもので、天和2年(1682)に芝田町四丁目(札の辻、現 芝五丁目)から移設された大高札場です。

ところで、元禄7年(1694)に次のような町触(『江戸町触集成』3137)が出ています。

【表】港区域にあった御入用高札場一覧

No.	場 所	No.	場 所	No.	場 所
1	芝車町(大高札場)	5	塩留橋南之方	9	芝田町四丁目(元札の辻)
2	土橋御堀端橋場	6	芝金杉裏壱丁目河岸	10	本芝町裏海手
3	芝口壱丁目御堀端	7	桜田善右衛門町御堀端	11	芝新錢座町河岸
4	難波橋御堀端	8	赤坂表伝馬町壱丁目向御堀端		『高札場書留』(旧幕引継書)より作成

一、常盤橋・日本橋・浅草・筋違・麹町・芝車町・芝獵師町・深川・明石町、右九か所の高札場、矢来・石垣の御普請仰付られ候あいだ、望みの者は明十八日・同十九日の両日の内、樽屋の所え参り注文を写しとり、右の場所をよくよく見分いたし、同廿日の七つ時に入れ札持参あるべく候(後略)

これは、高札場の矢来・石垣の工事を担当する業者選定に関する町触です。つまり、この9か所には矢来と石垣があり、これらの修復費用を幕府が負担していたことがわかります。冒頭の6か所は大高札場ですのでよいですが、「芝獵師町・深川・明石町」の3か所は、どのような高札場と考えればよいのでしょうか。

それぞれ「高札場書留」で確認すると、この3か所に該当すると考えられる場所は、いずれも「河岸」「海手」にあたっています。そのため、これらの場所は浦方の基本法令を掲示した「浦高札場」である可能性が高いと考えられます。

そして、矢来と石垣があり、その修復費用を幕府が負担し、6か所の大高札場と同列に記される点を勘案すれば、これらの場所を江戸の三大浦高札場と呼ぶことができるのではないかでしょうか。なお、「芝漁師町」の高札場は、下表のNo. 6かNo. 10のどちらかだと推定されます。

今後も検討が必要となりますが、もしこの仮説が正しければ、幕府が重要な基本法令を掲示する大高札場が、港区域には2か所あったことになるのです。

【参考文献】渡辺浩一「江戸の高札 - 三類型と維持・管理」
『歴史』第115輯、2010年9月)

文化財を引き継ぐために ～館蔵資料『勝海舟書画巻』を修理しました～

小澤 紘理子
(文化財保護調査員)

港郷土資料館では、港区の歴史を知るための様々な資料を収集し、展示などで公開しています。同時に、これらの資料を大切に保存し、次の世代へ引き継ぐことも、資料館の重要な仕事の一つです。その一環として、平成26年度は館蔵資料『勝海舟書画巻』の修理を行いました。

この資料は、勝海舟が生涯に遭遇した四つの危機の場面を描いた墨書きの紙片を、巻子本（巻物の形）に装丁したもので、本紙（書画が描かれている紙片）の1枚目に第一図、2枚目に第二図と第三図、3枚目に第四図が描かれています。これら3枚に加え、同じ巻子の後ろの部分には、勝邸内に起居した徳富蘇峰の「昭和九年首月十一日」付の奥書きがあり、上記4図が、海舟著の『断腸之記』の内容に一致する書画であることを記しています。

これは、三田図書館の特別資料室が昭和41年（1966）に入手した資料で、平成15年（2003）に港郷土資料館に移管され、平成19年度の港区指定文化財となりました。

もちろん、この資料も巻子本（巻物の形）に装丁された直後は美しいものだったと思われます。しかし、装丁に使用した紙や糊の性質と技術、経年劣化によって台紙に強い折れジワができていました（写真1）。本来、巻子本は開いた際には平らになるべきところ、きつい折れ目のために波打ったような状態になり、さらに裏台紙の継ぎ目部分には亀裂が入りはじめっていました。また、この強い折れ目の影響で、開閉する際に本紙にも亀裂が入る危険があり、展示公開が難しくなっていたのです。

修理着手前に専門技術者に改めて確認してもらったところ、強い折れの原因は、裏面を補強のために使用した紙（裏打紙）が厚く固かったことと糊の使い方の影響によるということでし

た。汚れやシミも若干ありましたが、虫食いの害はなかったため、修理はごく一般的な方法と工程で進められました。

まず修理前の状態の確認・調査を行った後、本紙を分割し、資料に無理のない範囲で汚れやシミを除去します。古い裏打紙を慎重に剥がして、新たな裏打ちを適切な和紙に交換し、本紙を継ぎ直して装丁を行うという手順です。なお、今回は、もとの装丁の表面に使われていた紙と布は再利用できたため、原装の印象をほぼそのままに留めることができました（写真2）。

適切な時期に正しい方法で修理を行うことで、資料の寿命を延ばすことができます。修理は次の世代へ引き継ぐために有効な手段の一つです。



写真1：修理前の状態

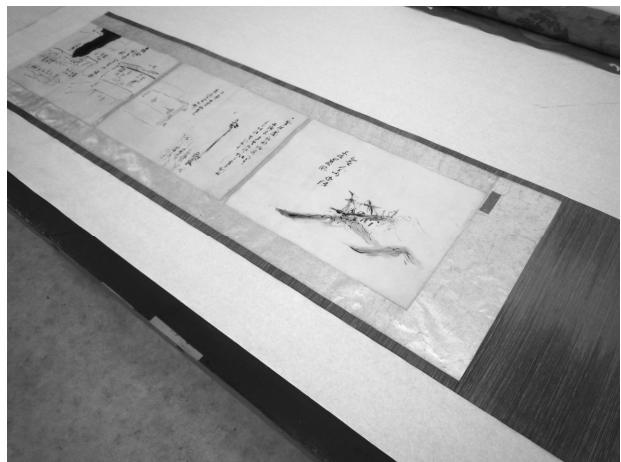


写真2：修理後

事業予定 (平成27年3月～)

コーナー展

- ・「平成26年度指定文化財展」
開催中～3月18日(水)
- ・「日本の開国とその影響」展
3月20日(金)～5月20日(水)
- ・「平成26年度新収蔵資料展」
5月22日(金)～7月15日(水)

講座など

・資料館講座

- 「縄文時代の森林資源利用」(全3回)
3月6日・13日・20日(金)

・親子学習会

- 「日本庭園にふれてミニミニ石庭
(枯山水)を作つてみよう!」(全2回)
3月14日・28日(土)

※各種事業の詳細や募集については、『広報みなど』や
郷土資料館ホームページでお知らせしています。

刊行物案内 (平成27年3月末刊行予定)

『研究紀要 17』

水戸浪士による第一次東禅寺事件に関する論考と資料紹介のほかに、クジラの歯や髪を使用した工芸品に関する論考を収載します。

(頒布価格未定)

『港区文化財のしおり』(改訂版)

平成22年度以降に指定・登録された文化財を追補し、掲載内容の一部修正を施しています。

(頒布価格未定)

※このほか、『増補港区近代沿革図集』『写された港区』など、各種刊行物があります。販売は展示室横の事務室、または郵送にておこなっています。郷土資料館ホームページに一覧の掲載があります。また、本誌のバックナンバーの一部(57号以降)は、ホームページでご覧いただくことができます。

事業報告 (平成26年10月～平成27年2月)

- ①コーナー展「港区指定文化財 館蔵資料 宇田川家文書 — 肥後熊本藩細川家御用達商人の記録 —」
平成26年7月18日～10月11日
- ②コーナー展「港区ゆかりの人物 — 嶽谷小波 —」
平成26年10月29日～12月17日
- ③資料館講座「東国の戦国時代」(全3回)
平成26年11月14日・21日・28日
- ④土曜体験教室「古代のアクセサリーを作ろう！」
平成26年12月13日・平成27年2月14日
- ⑤コーナー展「港区の遺跡 — 最近の発掘調査成果から —」
平成26年12月19日～平成27年2月18日

港郷土資料館では、港区の歴史や文化に関する資料を探しています。これらの資料をお持ちの方で、ご寄贈いただける場合や資料調査にご協力いただける場合は、当館までお知らせください。

港区立港郷土資料館の利用案内

交 通 JR「田町」駅下車徒歩5分、都営地下鉄「三田」駅下車(A3出口)徒歩2分、
都営バス「田町駅前」停留所下車徒歩2分、港区コミュニティバス(ちいばす)
「田町駅前」停留所下車徒歩2分、「田町駅西口」停留所下車徒歩3分

開館時間 9:00～17:00

(さわれる展示室の開室日時は、

火・金・土の12:30～16:30)

休 館 日 日曜日・祝日・第3木曜日

年末年始・特別整理期間

(臨時休館などはHPなどで隨時お知らせします)

入 館 料 無 料



『資料館だより』第75号

平成27年(2015)3月2日発行

編集・発行 港区立港郷土資料館

〒108-0014

東京都港区芝5-28-4

Tel. 03-3452-4966

Fax. 03-5476-6369

<http://www.lib.city.minato.tokyo.jp/muse/>

刊行物発行番号 26097-7541